日本呉音と呉方言の音韻的対応関係
―主に蟹摂字の音価を中心として―

全　　昌　煥

要　旨

日語呉音的蟹摂字存在両種讀音。這種現象帰根到底還是跟中国古代漢語語音変化以及方言発展規律有着密不可分的関係。漢語方言南北差異也体現出蟹摂字的不同発展方向、而且従其不同発展趨勢中可以追遡其源、対於日語呉音蟹摂字的両種讀音問題做出科学的、合理的解釈。

中国呉方言中蟹摂字也有両種讀音。這両種讀音就是一般所説的文讀和白讀。對此可以采用歴史比較語言学和方言学的研究方法、去考証日語呉音的両種讀音不同的来源。対於這種研究方法的正確与否、還可以従分析漢魏晋南北朝詩歌韻脚的角度進行客観的判断、並且達到正確推定呉音来源的目的。

キーワード…日本呉音　呉方言　漢音　蟹摂字　部

一、始めに

呉音体系と唐の長安音を母胎とする漢音とが韻母の面において、多くの不一致がみられることは常に指摘されていることである。漢音は整然とした体系を保っているのに対して、呉音は複雑な様相を呈している[1)]。その中でも、とりわけ蟹摂字は、特に注目に値するものである。

呉音の蟹摂字の特殊性を解明すること自体が、呉音の性格を明らかにする上で、最も重要な内容の一つであることは、言うまでもない[2)]。というのは、呉音の蟹摂字の中に、「ア」と「エ」の二種類の主母音が現れてくるのは周知の通りであるが、この主母音の言語音の源をどこに求められるかというのは、呉音の方処的要因を突き止めること、更に呉音の祖系音の位置付けとも直接関わる問題だからである。

呉音の蟹摂字の問題については、すでに先学達の諸説はあるけれども、その記述は分散的であって、特定の各韻について検討しているにとどまり、蟹摂全体に二種類の主母音が顕現する問題を解明しようとする試みはほとんどなされていないのである。とくに、呉音が中古の音韻体系に合わないということを指摘しながらも、ひたすら共通語的性格の音韻体系の角度から問題解明を図ってきたことには大きな問題点があったことを指摘しなければならない。勿論これはこれからの研究のなかで克服しなければならないことでもある。

筆者は拙稿(2000)において、呉音の蟹摂字の佳韻・皆韻字に見られる二種類の主母音について考察を試みたのであるが、呉音の佳韻・皆韻字の音形は現代呉方言における音韻実態と相対応しており、遡上して、南北朝時代の詩歌の韻脚を調べると、蟹摂字の佳韻・皆韻字に見られる「ア」と「エ」の二種類の主母音は、この時代の音韻事情と直接つながる蓋然性が高いということが分かってきた。

本稿では、今までの考察の結果を踏まえた上で、考察の範囲を広め、蟹摂字の全体を対象として、「ア」と「エ」の母胎音の追求を試みたい。

二、蟹摂字の問題点

(一)　蟹摂字

蟹摂字は、いかなる韻を含んでいるのか、またそれが通説の推定音の立場から見た場合、魏晋南北朝から唐に至るまで、いかなる方向へと変化を遂げていったのか、等のことについて見ることとする [3)]。呉音の蟹摂を考えるにあたって、まず原音側の音韻変化に大きくよらねばならないが、以下表で示すと、次の通りである。ここでは、開合の主母音だけを取り上げる。

表　1

番号	蟹摂の各韻	魏晋南北朝主母音	隋・唐
(1)	斉韻	æ	æ
(2)	佳韻	a	a
(3)	皆韻	ɐ	a
(4)	灰韻	ɐ	a
(5)	咍韻	ɐ	a
(6)	祭韻	æ	æ
(7)	泰韻	a	a
(8)	夬韻	æ	a
(9)	廃韻	ɐ	ɐ

主に王力(1980)・賴惟勤(1958)　・丁邦新(1975)により作成

これを中国語の音韻変化の方向から考えると、以下の三パターンに纏められる。

①　/æ /→/æ /：斉韻・祭韻；/ɐ /→/ɐ /：　廃韻

②　/ɐ /→/a /：皆韻；/ɐ /→/a /：灰韻・咍韻；/æ /→/a /：夬韻

③　/a /→/a /：泰韻；/a /→/a /：佳韻

以上見たように、蟹摂各韻の魏晋南北朝時代から中古の唐への変化過程を通説に従ってまと

めると、三つのパターンが見られるが、それでは、この音韻変化が日本の漢字音体系の呉音と漢音にどのように顕現してくるのかを、見てみることとする。

表　2

番号	蟹摂の各韻	呉音系の主母音	漢音系の主母音
(1)	斉韻	エ・ア	エ
(2)	佳韻	ア・エ	ア
(3)	皆韻	ア・エ	ア
(4)	灰韻	ア・エ・ウ	ア
(5)	咍韻	ア・エ	ア
(6)	祭韻	エ・ア	エ
(7)	泰韻	ア・エ	ア
(8)	夬韻	ア・エ	ア
(9)	廃韻	ア・エ	エ

主に沼本克明(1982)・(1986)と高松政雄(1986)により作成

中国語の音韻変化に対応する日本漢字音の呉音と漢音の変化を見ると、これは、おおむね以下の二つのパータンに纏められる。本論では、ア列音の主母音/a/は「ア」、エ列音の主母音/e/(ワ行の/we/も含む)は「エ」、ウ列音の/u/は「ウ」で表すこととする。合音系の主母音「ヱ」は、古層の呉音体系では開音の「エ」と同じくエ列音であるので、本論では「エ」音で処理する。

①　ア・エ(呉音系)→エ(漢音系)：斉韻・祭韻・廃韻

②　ア・エ(呉音系)→ア(漢音系)：佳韻・皆韻・灰韻・咍韻・泰韻・夬韻

この結果が、中国語の音韻変化に見られる上記の諸パータンと基本的に一致していることは、一目瞭然である。したがって、日本漢字音体系において、呉音から漢音への音韻変化は、基本的には中国語の音韻変化を忠実に伝写していることも容易に了解できる。

しかしながら、ここで、大きな問題点が見出される。それは、通説で中国の南北朝期の音韻を伝えているとされる呉音系の蟹摂の各韻に、いずれも/ア/・/エ/の二種類の主母音が現れることである。これは、何を意味するのであろうか。また、この二種類の主母音の源たるものをどこに求めるべきであろうか。これは、大いに関心の引かれる問題である。

(二)　先行研究

蟹摂字に関しては、諸説の主なものを検討し、考察を進めることにしたい。日本側の説として、主に藤堂明保、頼惟勤と沼本克明の説を引用しつつ、各説に対する批評を述べておくことにする。

藤堂明保(1987)は、「ア」と「エ」の二種類の主母音について、明確な結論は避けているよう

である。即ち、「ア」と「エ」との中で、どちらが呉音系で、どちらが呉音系から外されるべきかの何よりも肝心な問題について、はっきりした答えは出していないのである。これは藤堂明保(1969)の呉音と漢音の韻母について述べた際の論調と、かなり対照的なものである。

それでは、藤堂明保は中古の音韻体系に合わない蟹摂の音価についてどのような解釈を加えていたのであろうか。藤堂明保(1987)に、斉韻字に関する記述があり、蟹摂字についての視点の一斑を窺うことができる。藤堂明保は、斉韻が六朝期に韻母/ei/であったにも関わらず、なぜ「西ｻｲ」のようにア段に訳されたかという問いを発し、「この点に関する限り、呉音はどうも『切韻』の表す音系にあわない。」としながら、「この問題は呉音のもとをなした六朝の朝鮮漢字音がつかめぬかぎり、恐らく解決できまいと考える。」と結論付けている。

しかしながら、この説は、従い難いものであり、牽強すぎるきらいがする。呉音の時代的要因については、現段階では、見解の一致が見られ、南北朝期の音韻実態を反映しているとされている。この通説にもとづいて考えるならば、合理的手順としては、まず南北朝時代の文化の中心であった呉地方の言語音を考察の対象とすべきであるだろう。藤堂明保の上のような見方は、必ずしも明確な根拠があるわけではないし、また、近年の中国の方言研究成果にもとづいて、藤堂明保の説を眺めた場合、尚更、疑いをかけたくなるのである。

頼惟勤(1958)に、示唆に富んだ説が見られる。頼惟勤は主に 咍・灰・泰韻について述べているが、「泰韻が一貫して ai であるのに対して、咍灰韻がまず əi から出発して次第に ai に接近し、最後には泰韻に合流吸収される関係であるとほぼいえるだろう。」としている。また、咍・灰韻の/əi/から/ai/への変化は遅速があることを指摘し、咍韻のほうが早く、灰韻のほうがおそかっただろうと推測している。これは、蟹摂字の時代的要因を解明する上で、重要な意味をもつ一説であると考えられる。

沼本克明(1982)は、呉音の蟹摂の各韻に現れる二種類の主母音「ア」と「エ」について、緻密に論じている。沼本克明は、咍・泰・皆・佳・夬韻で「ア」表記が主流を成すが、かなり多く見られる例外音の「エ」は、切韻よりやや前の、六朝の音であろうとしている。そして、祭韻は「エ」を主な表記とするが、「ア」表記は　切韻よりやや前の、六朝の音であろうとする。斉韻の場合は、「エ」・「ア」の二通りの主母音があらわれるが、原音側から「ア」が現れる理由は不明であるとしている。

さらに、沼本克明は、灰韻が「ア」と「エ」以外に「ウ」の現れる現象にふれ、『経典釈文』の反切の用例を取り上げ、「わが呉音の祖系音が六朝期のある方言音にあったことを予想させるものである。」と述べている。日本漢字音研究において、いち早くこの点に鋭く気づき、指摘したのは、沼本克明である。この「灰韻」に関する論は、呉音の方処的要因を定める上で、もっとも傾聴すべき一説である。

(三)　呉方言の蟹摂字音

それでは、実際問題として、呉音の蟹摂字と呉方言の蟹摂字との間に、音韻的関係が存するか否かが、第一課題となる。当然のことながら、今の呉方言は、古代の言語音そのままでないことは言うまでもないが、慎重に正当な手続きを踏めば、現代呉方言の地理的分布等により古代の呉方言音を推定することも、またそれに基づいて、呉音と南北朝時代の呉方言との音韻的対応関係の抽出を試みることも可能であると考えられる。

また、呉方言には、文讀体系と白讀体系が見られ、文讀の方が中古の音を伝え、白讀は中古以前の呉地方の音を伝えるものが多いということが指摘されている[4)]。呉音と呉方言の音韻的対応関係という問題に取り組むのは、難しい状況にあるわけであるが、方法がまったくないわけではない。方言学の進展によって、新たに現代の方言によって、中国語の歴史を考えるという試みがなされているように、この問題に接近する道があるように思われる。

したがって、南部呉方言の代表とされる温州語と閩東方言の福州語における蟹摂字を概観することとするが、両者はかなり近い関係にあるということが指摘されよう。

表　3

各韻	字例	温州語音	福州語音
斉韻	西	sei	sɛ
	戾	lai・lei	luɔi
佳韻	解	ga(白讀)・ɦa	kɛ・kai(白讀)
	街	ɦa	kɛ
皆韻	界	ka	kai
	懐	ga(白讀)	huai(白讀)・køy
灰韻	回	wa	huoi
	悔	fai	huɔi
咍韻	乃	na	nai
	礙	ŋe	ŋai
祭韻	世	sei	siɛ
	蔡	tɕa	tɕai
泰韻	大	da・dei(白讀)	tai
	外	va	ŋiɛ
夬韻	敗	ba	pai・pɑi
	快	ka	ka・kuɑi
廃韻	吠	bei・vei	hiɛ
	穢	vu	uɔi

主に侯精一(1996)・袁家驊(2001)・大橋勝男(1992)・馬瀬良雄(1964)を参考に作成

蟹摂において、殆ど各韻に/a/系列と/e/系列の主母音が見られる。佳韻と皆韻には主母音/a/しか見当たらないが、呉方言の上海語で佳韻の「懈」と皆韻の「鍇」の主母音は/e/であるので、呉方言全体としては、佳韻と皆韻共に/a/と/e/の二種類の主母音が存することは否定できない。温州語の咍・灰韻に/e/が見あたらないが、同じ呉方言の上海語では咍韻の「開」は/ḱe/、灰韻の「魁」は/ḱue/で読まれていることに注目されたい[5)]。呉方言の場合、蟹摂各韻においては、明らかに/a/と/e/の二種類の主母音が存しており、歴史的事情と照らし合わせて考えると、呉音と呉方言の音韻体系の比較は決して無理ではない。

また、閩方言の福州語であるが、福州は閩東に位置し、呉方言との繋がりが最も深いものとして注目されている。これは、歴史的には「呉音南下」によるものである[6)]。また丁邦新(1988)は、呉方言は閩方言の祖系音であると唱えている。いずれにせよ、呉方言と閩方言とが密接なつながりをもつことは、歴史的事情から考えても、疑問の余地がないように思われる。

邵榮芬(1994)には、明末福州語の蟹摂の音価に関する考察があるが、そのなかでも泰韻・佳韻・皆韻等の蟹摂字に/a/と/e/の二種類の主母音が現れる。邵榮芬は結論の部分で、今日の福州語を明の末の音韻実態と比較して見ると、「その変化はさほど大きいものではない」と指摘している。明末福州語の蟹摂/における/a/と/e/の二種類の主母音は、呉方言の場合と同じく、文讀が中古音の影響を受けているものであるのに対して、白讀は当地方特有の音韻実態であることと関係する点が考慮されるべきであろう。

(四)　蟹摂灰韻字の「ウ」音について

蟹摂灰韻字の場合、呉音の中でその主母音に「ア」と「エ」が特に多い傾向があるが、「ウ」に訳されるものも若干現れてくる。沼本克明はこの「ウ」を呉音系のものと見なし、これに関して、呉音の祖系音が南北朝期のある方言音にあると論じているが、中国側の方言事情からみると、これは呉方言の音韻的特徴と直接つながるものであると考えられる。言い換えれば、「ウ」音自体は、呉方言の音韻的実態を伝写した可能性が最も高いと言えるのである。

呉方言において、永康語の音韻実態の中には可也注目に値するものがみられる。例をあげると、複母音/iă/・/uă/・/iə̆/・/uə̆/・/yə̆/・/wă/の中での第一音素は、介音であるにもかかわらず強く発音され、第二の音素は主母音であるが逆に弱く軽く発音される。これは、北方系の北京官話等と比べて、著しく違う点である。ちょうど北京官話の場合は、その逆である。永康話に見られるこの現象を一応「介音強化」・「主母音弱化」と呼ぶこととする[7)]。

呉音の蟹摂灰韻の「ウ」は、北方語の影響によるものであるとは考えられないことから、呉方言とのかかわりが深いのではないかと推測される。そして、呉方言の「介音強化」・「主母音弱化」現象は、次のような―蟹摂灰韻の「ウ」音訳例は呉音の方処的要因をますます正確に、尚且つ明示的に限定する手助けとなる貴重な資料となるのではないかという―問いを発せしめるのである。

沼本克明は、呉音の蟹摂灰韻の「ウ」音訳について、これは「中心母音を無視した形で」であって、中国側に理由があるのではないかと指摘している。これは正鵠を得た明断である。なぜならば、呉音の灰韻に「ウ」が顕現して来ること自体は北方系の言語音と朝鮮漢字音体系ではなかなか解明しにくく、永康語に見られる「介音強化」・「主母音弱化」現象は、北方系の北京官話には見られないものであり、呉方言の音韻的特徴だからである。灰韻の「ウ」音の出所を考えるに当たって、現実に手懸りとなるのは、呉方言をおいてはないのである。

永康語に見られる「介音強化」・「主母音弱化」の現象が古代において、日本呉音に伝写される際、いかなる音価を持っていたものであったか。これは、大変興味深いものであるが、本題の一貫性のために、この点が呉方言とのつながりが最も大きいという点を指摘するにとどめ、また次回に検討することにしたい。

三　蟹摂字の音価

蟹摂字の音価と言っても、これは日本呉音と中国古代音韻体系の両方を見渡す必要が生じるため、まず日本呉音に顕現する実態を考えに入れ、またそれが切韻系の韻書『広韻』の記録と繋がる内容があるか否かを確認して見ることによって、呉音と原音側との音韻実態を結びつけて考えることができるのではないかと思われる。

(一)　呉音系の蟹摂字

古代日本の万葉仮名は、呉音体系に繋がるものとされている。この点について、沼本克明(1986)は、「従来、古事記の仮名は呉音系字音を主たる背景として成立したものであるとされて来たのである。恐らくこの考え方は通説として大局的には動かないものであろう。」とし、また、「ともかく、基本的には、古事記の仮名は切韻を最下限とする魏晋南北朝期の前切韻音を起源として成立していた日本漢字音を背景として成立したものと言えるであろう。そしてこの基本的性格」は、「「万葉集」に使用された仮名にも共通しているものである。」と述べている。

万葉仮名に於ける音韻的特徴は平安鎌倉時代の仏典にも受け継がれていく。万葉仮名に現れる音韻的特徴は、現代呉方言並びに魏晋南北朝期の江南系詩人の韻脚事情と関連付けられるものがかなり多い。従って、万葉仮名の音韻的事情も必ず考慮に入れる必要がある[8)]。

以下の表において、古層の呉音体系とされる万葉仮名と後の仏典に現れるいわゆる中層の呉音体系の例も取り上げる。用例はできるだけ種々の文献に現れてくるものを対象とする。紙幅の関係ですべてを網羅することはできないが、典型的用例は考察の対象から外さないことに努めた。

表　4

各韻	主母音	呉音に顕現する字音表記
斉韻	「ア」	提・諦・済・礼・帝・弟・妻・体
	「エ」	計・奚・谿・雞・溪・稽・啓・霓・謎
佳韻	「ア」	買・崖・差・隘
	「エ」	畫・賣・解・懈・佳・罣
皆韻	「ア」	皆・排・拜・拝・界・騃・械・戒
	「エ」	戒・階・俳・恠・疥・芥・懐・壞
灰韻	「ア」	昧・退・玫・背・雷・頽
	「エ」	毎・梅・浼・妹・昧・倍・倍・杯・珮・背・廻・悔
	「ウ」	堆・槌・推・堆・頽
咍韻	「ア」	開・来・怠・逮・乃・胎・綵・愛・載
	「エ」	慨・概・開・凱・愷・該・碍・礙・愛
祭韻	「ア」	歳・滞・際・祭
	「エ」	幣・弊・敝・蔽・世・逝・勢・誓・迷・慧
泰韻	「ア」	大・最・泰・柰・帯・蓋・害・太
	「エ」	沛・会・外・膾
夬韻	「ア」	邁・喝・唄・敗
	「エ」	快
廃韻	「ア」	穢・吠・廃
	「エ」	穢

主に坂本幸男注(1967)・沼本克明(1982)　・小倉肇(1995)・舩城俊太郎(1993)を参考に作成

蟹摂の各韻に「ア」と「エ」二種類の主母音が現れるのは明らかであり、これは蟹摂全体に認められる傾向でもあることが注目を引くものである。各韻において、「ア」・「エ」の分布は、決して均等な量ではない。それは、ある意味では、蟹摂の各韻が伝来当時中国側の主母音/a/・/e/と直接関わる可能性が高いものであって、中国語の音韻変化の中で主母音が既に/a/から/e/への転換が行われたものは、「エ」音のものが主流をなし、逆の場合は「ア」音のものが優勢であった可能性もあり得る。勿論類推系の音表記ももう一つの可能性として認められるが、原音を忠実に伝写しようとする仏教世界の伝統等から見ると、なんと言っても原音との関わりが第一候補として上がってくることは、間違いない。上記の用例の中で「夬韻・廃韻」は、もともと字数の少ない韻であるので、それに比例して呉音体系に取り入れられたものは、少なかったのであり、他の各韻とは異なった背景があることも指摘しておきたい。

(二)　『広韻』に於ける蟹摂の反切

日本呉音に現れる二種類の主母音は、中国の古代の文献記録からその痕跡たるものが見出せるかというと、答えは肯定的なものである。中古の韻書『広韻』を調べると、蟹摂の各韻はそれぞれ量的に違いはあるものの、呉音の「ア」・「エ」と直接繋がりを持つものと思われる音韻記録(反切)が見られる。調べた結果を見ると、次のようなものがある[9]。

(1)　斉韻

①　/a/系列の反切

蠡一盧啓切(斉韻)又落戈切(戈韻)　　謑一胡礼切(斉韻)又呼訝切(禡韻)

臠一戸圭切(斉韻)又諾何切(歌韻)　　洼一古攜切(斉韻)又烏瓜切(麻韻)

②　/e/系列の反切

蠡一盧啓(斉韻)切又呂支切(支韻)　　氐一都奚(斉韻)切又丁尼切(脂韻)

玭一千礼(斉韻)切又疾移切(支韻)　　莉一郎奚(斉韻)切又直尼切(脂韻)

(2)　佳韻

①　/a/系列の反切

緺一古蛙切(佳韻)又古禾切(戈韻)　　蛙一烏媧切(佳韻)又烏瓜切(麻韻)

叉一楚佳切(佳韻)又初牙切(麻韻)　　媧一古蛙切(佳韻)又古華切(麻韻)

②　/e/系列の反切

郫一薄佳切(佳韻)又符支切(支韻)　　唲一於佳切(佳韻)又汝移切(支韻)

茈一士佳切(佳韻)又疾移切(支韻)　　麓一山佳切(佳韻)又所宜切(支韻)

(3)　皆韻

①　/a/系列の反切

浿一普拜切(怪韻)又普蓋切(泰韻)　　眇一莫拜切(怪韻)又莫撥切(末韻)

艐一古拜切(怪韻)又口箇切(箇韻)　　韎一莫拜切(怪韻)又莫撥切(末韻)

②　/e/系列の反切

篋一山皆切(皆韻)又所宜切(支韻)　　簣一苦怪切(皆韻)又求位切(至韻)

嘳一苦怪切(皆韻)又丘愧切(至韻)　　梩一卓皆切(皆韻)又里之切(之韻)

(4)　灰韻

①　/a/系列の反切

挨一都回切(灰韻)又奴禾切(戈韻)　　敦一都回切(灰韻)又度官切(桓韻)

輩一胡罪切(賄韻)又胡瓦切(馬韻)

②　/e/系列の反切

裴一薄回切(灰韻)又符非切(微韻)　　桅一五灰切(灰韻)又過委切(紙韻)

蓷一他回切(灰韻)又尺隹切(脂韻)　　檇一昨回切(灰韻)又酔綏切(脂韻)

(5)　咍韻

①　/a/系列の反切

僾一烏代切(代韻)又都郎切(唐韻)　　曖一烏代切(代韻)又於蓋切(泰韻)

②　/e/系列の反切

逮一徒耐切(代韻)又羊至切(至韻)　　菑一徒哀切(咍韻)又直尼切(脂韻)

(6)　祭韻

①　/a/系列の反切

癘一力制切(祭韻)又落蓋切(泰韻)　　愒一去例切(祭韻)又苦蓋切(泰韻)

糲一力制切(祭韻)又落蓋切(泰韻)　　忕一時制切(祭韻)又他蓋・徒蓋切(泰韻)

②　/e/系列の反切

勘一餘制切(祭韻)又神至切(至韻)　　彗一詳歳切(祭韻)又徐切(至韻)

(7)　泰韻

①　/a/系列の反切

大一徒蓋切(泰韻)又唐佐切(箇韻)　　蛻一他外切(泰韻)又湯臥切(過韻)

濊一呼会切(泰韻)又呼括切(末韻)　　劊一古外切(泰韻)又古活切(末韻)

②　/e/系列の反切

噦一呼会切(泰韻)又於月切(月韻)　　茇一博蓋切(泰韻)又房越切(月韻)

(8)　夬韻

①　/a/系列の反切

憎一烏快切(夬韻)又烏括切(末韻)　　獪一古邁切(夬韻)又古外切(泰韻)

憎一烏快切(夬韻)又烏外切(泰韻)　　穡一苦夬切(夬韻)又苦會切(泰韻)

②　/e/系列の反切

駃一苦夬切(夬韻)又苦穴切(屑韻)　　啐一倉夬切(夬韻)又子聿切(術韻)

(9)　廃韻

①　/a/系列の反切

濊一於廃切(廃韻)又呼会切(泰韻)　　艾一魚肺切(廃韻)又五蓋切(泰韻)

怖一芳廃切(廃韻)又普蓋切(泰韻)

②　/e/系列の反切

茇一符廃切(廃韻)又房月切(月韻)　　橛一方肺切(廃韻)又房越切(月韻)

怖一芳廃切(廃韻)又拂伐切(月韻)

ここで、　/a/系列の反切とは諸説の中で、南北朝時代その主母音が/ɑ/である歌韻と/a/となる泰韻を指し、/e/系列の反切とは、主母音が/e/の支韻・脂韻　と/ə/の微韻・之韻を含む。

それでは、ここで一言断って置かねばならないことがあるが、泰韻字の来歴からも明らかであるように、泰韻の主母音について、通説では/a/とされている [10)]。蟹切字の中で、泰韻字が

最も/a/的性格の強いものであることは、泰韻字の出身等の方から考えても、明らかである。

泰韻字は先秦両漢の月部(主母音/ɑ/)と支部(主母音/e/)からきているが、それぞれ/ɑ/と/e/から/a/への変化の遅速は、方言ごとに異なっていたとしても、それはごく当然のことであったはずである。南北朝時代の蟹摂各韻の中で、/a/が主流を占めたものとして、まず取り上げられうるものは、泰韻である。これは、頼惟勤(1958)の指摘からも察知できる。

もう一つは、同じく/a/系列とする歌韻(/ɑ/)と泰韻(/a/)が、南北朝期の韻脚分析にも見られるように、如何して押韻する例が少ないかと言う疑問であるが、その解釈としては、以下の理由が取り上げられる。歌韻(/ɑ/)の主母音は後舌広母音であり、泰韻(/a/)は前舌狭母音である。この点が、韻文に於ける押韻事情を左右したのではないかと推測させるものである。

/e/系列の反切としては、古層の呉音体系である万葉仮名のエ列音に現れる脂韻・支韻・微韻の反切を取り上げたが、南北朝の韻文の場合、いずれも蟹摂の各韻字と通韻する用例が出てくることから、脂韻・支韻・微韻との押韻例を蟹摂各韻の/e/系列音を判断する指標とする。

(三)　魏晋南北朝詩歌の韻脚における蟹摂字の音価

切韻系の韻書『広韻』の反切例からも分かるように、蟹摂各韻は、量的違いは存するものの、その主母音としては、音韻変化の影響により、/a/と/e/の二種類の主母音に跨る字群があったことは、明らかな事実であると言える。とりわけその/a/と/e/の量的違いと言うのは、各方言においてそれぞれ異なった様相を呈していたに違いない。蟹摂字の二種類の主母音について、中国側の張光宇(1994)に注目に値する指摘がある。張光宇は、蟹摂開口四等字(斉韻字)が呉音の中で/ai/と/ei/の二種類の音形が現れ、漢音で/ei/の音形が現れる点、また呉方言の南にある閩方言にも/ai/が現れる点等から、蟹摂開口四等字(斉韻字)の/ai/は、中古期の呉方言の特徴であると指摘している。蟹摂の他の韻についての詳しい論は見当たらないが、今まで呉音と呉方言の関係に於いて、蟹摂蟹摂開口四等字(斉韻字)の/ai/音についての、かくのごとき明確な論はなかったのである。

しかしながら、張光宇の論が斉韻字を含む蟹摂の各韻に当てはまるかといえば、またそうでもないことに気づく。それは、筆者の調べによると、斉韻字を含む蟹摂の各韻の字が泰韻字又は脂韻・支韻字と通韻する例を調べて見ると、泰韻と通韻する字群と脂韻・支韻と通韻する字群は、基本的には分かれていることが注目を引くのである。特に同一韻であっても、南北の違いは、詩人の韻脚からはっきりと分かってくるのである。

蟹摂の各韻は、通説では幾つかの部に纏められているが、ここでもその分類に基づいて、蟹摂字の音価における南北の差異について、概観することとする。各部は、以下の通りである[11)]。

①　泰部：泰韻・佳韻

②　灰部：咍韻・皆韻・灰韻・廃韻

③　祭部：夬韻・祭韻・斉韻

(1)　**泰部**

まず、泰部について見ることとするが、主に斉・梁・陳時代の泰韻字を取り上げる。魏晋宋を対象外とするのは、以下の理由によるものである。魏晋宋の泰韻字の押韻例をみると、入声韻と通韻する例が見られ、これは当時泰韻字の一部分がまだ韻尾/-t/から/-i/へという変化が完全に終了していないことを意味しているのである。したがって、日本漢字音体系の中で中層の呉音体系の泰韻字「開・才・乃・来」等は、「アイ」という音形に訳されている。これは、明らかに原音側の泰韻字の韻尾が/-t/から/-i/へという変化を成し遂げた後での音韻の伝写にほかならぬことである。勿論、古層の呉音体系には、韻尾/-t/を切り捨てたともいえる直音形の「ア」音形が現れていることも事実である。

斉・梁・陳の泰韻字の押韻状況を詩人の本籍別に分けて考察することとするが、南北差異の傾向は認められるものであると考えられる。以下、その実態を概観することとするが、泰韻字の共通点といえることは、南北を問わず、その主母音/a/が優勢を占めていたということである。しかし、以下の統計資料によると、南の呉方言地域では、極一部の字はまだ/e/系列の音が残っていたのではないかという疑問が生じるのである。ここで泰韻字の韻脚を考察する対象としたのは以下の詩人である[12)]。

表　5

時代	南北別	本籍	詩人
斉 (479－502)	北方系	河南省	謝超宗(?483)・謝眺(464－499)
		山東省	王俭(452－489)
	南方系	江蘇省	竟陵蕭子良(460－494)・陸厥(472－499)・張融(444－497)
		浙江省	孔稚珪(447－501)
梁 (502－557)	北方系	河南省	江淹(444－555)
		河北省	張纘(498－549)
		山東省	王僧孺(465－522)・何遜(?－518)・王筠(481－549)
	南方系	江蘇省	到洽(477－527)・陶宏景(456－536)・簡文帝(503－551)・梁元帝(508－554)
		浙江省	沈約(441－513)・呉均(469－520)
陳 (557－589)	北方系	河南省	江総(519－594)
		山東省	徐陵(507－583)・徐孝克(?)
	南方系	江蘇省	顧野王(519－581)
		浙江省	沈烱(501－560)
北周(557－581)	北方系	河南省	庾信(513－581)

主に王力(1936)・于安瀾(1936)・逯欽立(1983)・王洪(1991)により作成

北方系では庾信の詩歌『鄭偉墓誌』に「泰韻(外・蓋)＋皆(怪)韻(拜)」型が見られるが、其の他の北方系詩人はほとんどが「泰韻＋泰韻」型の押韻形式を取っている[13)]。それでは、南方系ではどうであったかというと、多くの詩人の韻脚は北方系詩人の場合と同じく「泰韻＋泰韻」型であるのに対して、南方系呉地方の張融・簡文帝・顧野王の詩歌には「泰韻＋咍(代)韻」・「泰韻＋廃韻＋灰(隊)韻」等の押韻例が見られる。なかで特に簡文帝の詩歌『七励之三』の韻脚の「肺(廃韻合口三等字)・菜(咍韻開口一等字)・繪(泰韻合口一等字)・綷(灰韻合口一等字)」において、咍韻開口一等字は先秦両漢の之/ə/部から、灰韻合口一等字は先秦両漢の脂/ei/・微/əi/両部から来ていること、また今の呉方言でも「廃・咍・泰」の部分的字が/a/と/e/の二様の主母音を持っている等を総合的に配慮すると、当時呉方言地域でごく一部の泰韻字が/e/系列の音字を持っていたとしても決して不思議ではないと考えられる。魏晋南北朝期に、北方系では、泰韻字が基本的には主母音が/a/であったのに対して、南方の江南地域では少数の泰韻字が一歩遅れて進行し、それがまた温州語の白讀字音「大」(/dei/)のように、今日まで伝えられるに至ったこともありうるべきことであろう。

(2)　**灰部**

灰部においては、咍韻の用例を中心として考えてみたい。まず咍韻一等字「愛」の使い方を見ることとするが、ここでも方言の南北差と関わる傾向が認められる。以下梁の江淹(河南)と陳の顧野王(江蘇蘇州)の押韻例である。

江淹『斉太祖誄』：義愛

顧野王『餞友之綏安詩』靄瀬會蓋鱠海愛鄶

江淹の『斉太祖誄』で「義」は支部寘韻字で、灰部咍韻字「愛」と韻を踏ませている。「義」は先秦両漢では歌部に属するが、江淹の時代には明らかに/e/が主流をなす主母音であって、/a/ではなかったことは、歴然としている。

また、顧野王の『餞友之綏安詩』で灰部咍韻字「愛」は、泰韻字「靄瀬會蓋鱠海鄶」と韻を踏んでいる。泰韻字の特徴から考えて、この「愛」はその主母音が/a/であったと判断しがたくもないが、上記の江淹の『斉太祖誄』の場合と照らし合わせて考えると、また江淹と顧野王の場合、時代的にさほどかけ離れていなかった事等の点をも考えに入れると、灰部咍韻字「愛」に二様の音があったと考えるのが、合理的であるようにも思われる。

灰部咍韻字の場合、もう一つの事情を考慮に入れる必要がある。それは、頼惟勤は古代音韻変化のなかで咍・灰韻が/ai/へと変化していく際、咍韻のほうが灰韻より速かったであろうと指摘しているが、この時期においては、南北差としては、北方系のほうが/ai/への転換が幾分速かったのではないだろうか。その根拠としては、江南系詩人の作品のなかで魚・咍・之・支韻が韻を踏むことが取り上げられる。以下は江南系の詩人に見られる用例を取り上げる。

表　6

作者名	時代	本籍	詩作	韻脚
陸機	晋	江蘇	『挽歌之一』	茲基旗闇詩時轜期辞来騏臺知時思能離
陸雲	晋	江蘇	『贈張仲膺』	離淇来之
陶潛	晋	江西	『乞食』	之辞来杯詩才貽
宋明帝	宋	江蘇	『自紵篇大雅』	舒来初餘

主に于安瀾(1936)・逯欽立(1983)により作成

江南系詩人の韻脚に顕著な傾向が見られるのは、灰部咍韻字の「来・臺・杯・才」等が魚韻字(/ɔ/)、または之韻字(/ə/)・支韻字等(/e/)と押韻することである。灰部咍韻字の「来・臺・杯・才」(一等字)は、主に先秦両漢の之部(/ə/) から由来する。これは江南地域において灰部咍韻字の「来・臺・杯・才」が/e/系列の音であったことを証明しているものと考えられる。このような押韻例は同じ時期の場合でも、南方系の詩人作品に比較的に多く見出され、于安瀾(1936・P. 255―259)によって調べると、「咍韻＋之韻」等の押韻例は江蘇出身の陸雲に四例も見られる。

江南系の詩人の詩作に現れるこのような傾向は、当時呉地方において部分的灰部咍韻字は中古の/ai/への転換が北方方言と比べて相当遅れて進んでいたことを如実に物語っているのである。因みに古層の呉音体系を見てみると、魚韻・支韻・咍韻字はエ列乙類(中舌音)に現れ、魚韻・之韻・咍韻字はオ列乙(中舌・前舌音)類に現れる。江南系詩人の韻脚に見られるこのような事情と古層の呉音における密接なる繋がりは、決して偶然の一致とは解しがたいものであり、中国側の呉方言の音韻事情とも直接かかわってくるのではないかと考えられる。

(3)　**祭部**

祭部においては、主に斉韻の事情でもって、祭部における南北の差異について考えて見たい。北方系の代表的詩人としては魏の應瑒(河南汝南出身)、南方系の詩人としては晋の陸雲(江蘇蘇州出身)を取り上げる。この二人の詩作の中には明らかに蟹摂祭部の音価の方処的差異が見られる。

應瑒　『侍五郎官中将建章臺集詩』：哀徊棲淮頽泥諧梯階疲微宜帰懐

陸雲　『思文』：斉妻斯儷

『喜霽賦』：離斉躋泥閨

應瑒の『侍五郎官中将建章臺集詩』で「棲・泥・梯」は斉韻四等字であり、「哀・徊・頽」は灰部一等字、「淮・諧・階・懐」は灰部二等字、「疲・宜」は支部三等字、「微・帰」は微部三等字である。斉韻四等字の主母音が/a/系列の音であったか、それとも/e/系列の音であったか、斉韻と通韻している諸韻の出身を見ると、斉韻字の主母音がどちらに帰するべきかが分かってくると考えられる。

表　7

韻脚	先秦両漢音	魏晋南北朝音
棲・泥・梯	/iei/(脂部)	/iæi/(祭部斉韻四等)
哀・徊・頽	/ə/(之部)・/əi//uəi/ (微部)	/ɐi/・/uɐi/(灰部灰韻)
淮・諧・階・懐	/ei/(脂部)・/oəi/(微部)	/oɐi/・/eɐi/(灰部皆韻)
疲・宜	/iɑi/(歌部)	/ie/(支部支韻)
微・帰	/iuəi/(微部)	/iuəi/(微部微韻)

主に王力(1985)・于安瀾(1936)・逯欽立(1983)により作成

北方系の詩人應瑒は斉韻(/æ/)字がいずれも主母音を/ɐ/・/e/・/ə/とする/e/系列のものと通韻しているが、「疲・宜」を除く殆どが先秦両漢の時代には、その主母音が/e/系列の/e/・/ə/であることに注目されたい。この事例は北方系の方言地域では、祭部斉韻四等字の場合、主母音/e/が主流を成していたか、もしくは呉方言に一歩先んじて中古の/æ/へて転身していたのではないかと考えさせるものである。因みにこの時期に「疲・宜」は主母音が明らかに/e/であったはずである。

それでは、陸雲の『思文』と『喜霽賦』では、斉韻四等字がどういう音価で現れてくるかを検討して見ることにしたい。「斉・躋・泥・閨・妻」は斉韻四等字、「斯・儷・離」は切韻系の支韻字である。それぞれの出身を比較すると、次の通りである。

表　8

韻脚	先秦両漢音	魏晋南北朝音
斉・躋・泥・閨・妻・儷	/iei/(脂部)/iue/(支部)	/iæi/(祭部斉韻四等)
斯・離	/iɑi/(歌部)	/ie/(支部支韻)

主に王力(1985)・于安瀾(1936)・逯欽立(1983)により作成

同じく祭部斉韻四等字であっても、陸雲の詩歌の韻脚の押韻は、北方系の詩人應瑒とは明らかに異なった傾向が見られる。斉韻四等字と通韻するものが、前述の應瑒は殆どが脂・之・微韻等先秦両漢から魏晋南北朝に至るまで、その主母音を/e/・/ə/とする/e/系列ものが多いのに対して、陸雲の詩歌では歌部からきたものであることが指摘できる。したがって、張光宇が呉音の字音例及び中国方言分布の事情から、蟹摂四等字の/-ai/を中古の呉方言の特徴的音価と指摘したのは基本的には正しいものであると認めなければならない。しかしながら、現代呉方言及び呉方言の影響を強く受けている閩東方言(福州語)の蟹摂音字の音韻的特徴[14]、また魏晋南北朝の詩歌の韻脚事例を見ると、確かに蟹摂四等字の場合は、主母音が/-ai/であった蓋然性も高いが、灰部の如く北方方言と比べて、呉方言のほうが一歩遅れて中古の/æ/へと転身していた可能性も否定できない。

泰部の場合、同じく魏晋南北朝期に北方系では/a/が優勢であったのに対して、江南系でも/a/

が主流を成してはいたものの、ごく一部の字群において/e/音が残されていた徴候が認められる。現在温州語の泰韻字「大」の白讀音が/dei/であることに注目されたい。灰部の場合、頼惟勤の指摘している如く咍・灰韻が/əi/から/ai/へと合流していく中で咍韻の方が速く、灰韻の方が遅かった可能性が高いが、詩歌の韻脚事情を見る限り、呉地方での/əi/から/ai/への転換は北方語と比べて更に遅かったと考えられる。それは、現在温州語の咍韻字「礙」が/ŋe/で読まれていることも一つの貴重な手懸りである。祭部の場合、現在北方語では、主に母音の前舌化方向を辿り、その主母音が/i/であるのに対して、呉方言及び閩方言では前舌母音/e/音以外に/a/音が残されている。中国語の音韻変化における南北の違いと南北朝期の押韻事情をつきあわせて考えると、呉音の蟹摂音の特殊性は呉方言と最も密接な繋がりをもつものと考えられる。

四、終わりに

本論では、日本呉音の蟹摂字において「ア」と「エ」の二様の主母音が顕現する音韻現象について、原音側の事情から考察を試みたものである。特に呉方言の永康語に見られる「介音強化」・「主母音弱化」現象からも端的に示されているように、中国北方語、また朝鮮漢字音との関係からはとうてい解明のしようのない灰韻字の「ウ」音訳例は、呉方言の音韻的特徴と最も密接な繋がりを持っていることと思われる。当然のことながら、蟹摂の各部、各韻のなかにおいても、呉音との対応関係にある事例が取り上げられることは、前述の通りである。

それでは、如何して呉方言にかような音韻現象がみられるかといえば、それは当時呉の地域において蟹摂の各韻の音韻変化が北方語と比べて、やや遅れて成されていたことと深く関わる問題ではないかと考えざるをえないのである。

本論では呉方言において、文讀・白讀二種類の音が存している点、また「介音強化」「主母音弱化」等北方官話系と著しく異なる性格を持っている点を視野に入れつつ、切韻系の韻書『広韻』の反切に見られる蟹摂字の/a/・/e/系列の記録を取り上げ、またこれに類する言語事情が切韻以前の魏晋南北朝時代の韻脚に具現しているかどうか、さらに当時蟹摂字が江南系と北方系詩人のなかでどのような差が現れているかについて考察を試みたのである。その結果、同じ蟹摂字の場合でも、南北の詩人の韻脚にそれぞれ異なる事情が存し、これは当時南北に於いて蟹摂の音韻変化の遅速と密接なかかわりをもつものであって、種々の事実を重ね合わせると、日本呉音の蟹摂字の主母音は呉方言との関わりをもつ蓋然性が高いことが分かってきた。

本題がさらに徹底的に検証されるためには、呉方言の蟹摂韻字の地理的分布を緻密に調査し、魏晋南北朝期の蟹摂韻字と/a/系列の泰韻字及び/e/系列の之韻・微韻・支韻等との押韻事情をより広く、尚且つ深く調べることが必要となるが、これらの残された問題は今後の課題としておきたい。

＜註＞

1) 頼惟勤(1989)(p.273)参照
沼本克明(1982) (p.560－564)参照
藤堂明保(1987) (p.85)参照
2) 頼惟勤(1989)に見られるように、呉音の蟹摂字は漢音の場合と比べて、複雑な様相を呈しているのであり、複雑性そのものは、典型的であるともいえる。従って、蟹摂字の音価の解明は、呉音の方処的要因を究明する上で最も重要な一環であると考えられる。
3) 本論では主に王力の説にしたがって、考察を進めることを旨とする。以下特に注記のない場合、古代の音韻記号等は王力の説に頼って記すことを原則とする。ただし、泰韻・佳韻・咍韻・灰韻は頼惟勤(1989)丁邦新(1975)の再構音に従い、音韻記号もそれに合わせることとする。また蟹摂諸韻の場合、詳しく記すと、(1)斉・薺・霽；(2)佳・蟹・卦；(3)皆・駭・怪；(4)灰・賄・隊；(5)咍・海・代；(6)祭；(7)泰；(8)夬；(9)廃となるが、通例に従って最初の韻を代表韻とする。
4) 游汝杰(2000) (p.136)参照
游汝杰は「方言に於ける文読音は隋唐の科挙制度が実施されて以来形成されたものであり、白讀はもっと古い時期の音を伝え、文読は(白讀より)やや後の音を示している。」としている。
張光宇「漢語方言発展的不平衡性」(1991) 参照
張光宇は「基本的に、白読とは方言固有のものであり、…文讀とは外来音である。」としている。
しばしば指摘があるように、中国の文化は北から南へ伝わるのが主な流れである。従って文讀音が先秦両漢地代の文化の中心である北方語によるものが含まれていることもあり得ると考えられる。
5) 王力(1980)(p.175－176)参照
6) 張光宇(1994)参照
7) 袁家驊(2001)(p.81)では、呉方言の永康語と北方官話とが著しく異なる特徴が紹介されている。それは、複母音/iă/・/uă/・/iĕ/・/uĕ/・/yĕ/・/wă/の中での第一音素は、介音であるにも関わらず強く重く発音され、第二音素は主母音であるのに逆に弱く軽く発音されると言う。この北方語とは明らかに異なる音韻現象は、かなり注意を喚起するに値するものと筆者は考えている。古層の呉音体系において支韻字がイ列乙類とエ列乙類に現れるが、永康語の北方官話と著しく異なっているこのような特徴は、古層の呉音体系の究明において大いに期待できる貴重な手懸りであると考えられるからである。北方語の場合と、著しく異なる永康語のこのような特徴を筆者は「介音強化」「主母音弱化」と定義づけることとする。
8) 沼本克明(1986)(p.75・80・81)参照
9) これは余廼永(1993)によって纏めたものである。筆者が本論で触れているように、/a/系列とは「歌・戈・麻・箇・唐・泰」韻等、呉音系の字音で「ア」列音で伝写されているものを指し、/e/系列音とは「支・脂・之・微・祭」韻をも一括しているが、いずれも原音側の字音が「ア」・「エ」に訳されている基本的方向を踏まえた上での概括的分類である。
10) 中国側の説として王力と丁邦新を取り上げるが、王力の再構音は/ɑ/、丁邦新再構音は/a/ である。
王力(1985)(p.127)参照
丁邦新(1975) (p.241)参照
11) 蟹摂を①泰部(泰韻・佳韻)・②灰部(咍韻・皆韻・灰韻・廃韻) ③祭部(夬韻・祭韻・斉韻)と分類したのは王力に従ったものである。
王力(1985)(p.125・127・128・129・155－157)参照
12) 詩人の生きた時代・本籍等の資料は主に以下の資料を参考としている。
王力(1936) 参照
于安瀾(1936) 参照
王洪(1991) 参照
逯欽立(1983) 参照
13) 于安瀾(1936)(p.445－446)参照
逯欽立(1983) 参照
丁邦新(1975) 参照
14) 蟹摂四等字が閩方言にて/-ai/音で読まれるものが多いことは張光宇(1994)に見られる。

＜参考文献＞

于安瀾　1936,『漢魏六朝韻譜』汲古書院

王力　2000,「南北朝詩人用韻考」『清華学報』商務印書館

王力　1980,『漢語史稿』(中華書局)

王力　1985,『漢語音韻史』中国社会科学出版社

大橋勝男　1992,『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』第四巻

小倉肇　1995,『日本呉音の研究』新典社

王洪等編　1991,『古詩百科事典』光明日報出版社

袁家驊　2001,『漢語方言概要』語文出版社

侯精一編　1996,『現代漢語方言音庫』上海教育出版社

坂本幸男等訳注　1967,『法華経』岩波書店

高松政雄　1986,『日本漢字音概論』風間書房

逯欽立　1983,『先秦漢魏晋南北朝詩』中華書局

張光宇　1994,「呉語在歴史上的拡散運動」『中国語文』語文出版社

張光宇　1991,「漢語方言発展的不平衡性」『中国語文』語文出版社

丁邦新　1988,「呉語中的閩語成分」『中研究院史語所集刊』中央研究院語言研究所

丁邦新　1975,『魏晋音韻研究』中国台湾・中央研究院語言研究所

藤堂明保　1969,『漢語と日本語』秀英出版

藤堂明保　1987,『藤堂明保中国語学論集』汲古書院

沼本克明　1982,『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院

沼本克明　1986,『日本漢字音の歴史』東京堂出版

舩城俊太郎　1993,「変体漢文はよめるか　『将門記』による検討」三省堂

馬瀬良雄　1964,「方言意識と方言区画」(『日本の方言区画』) 東京堂

頼惟勤　1989,『中国音韻論集』汲古書院

游汝杰　2000,『漢語方言学導論』上海教育出版社

余廼永校註　1993,『新校互註宋本廣韻』中国香港・中文大学出版社

主指導教員（大橋勝男教授）、副指導教員（大石強教授・舩城俊太郎教授）